



Title	Crossing the Border between Romance and Realism : A Study of Maugham, Stevenson and Charlotte Brontë
Author(s)	乙黒, 麻記子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57847
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【25】

氏名	乙黒麻記子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23479号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	Crossing the Border between Romance and Realism : A Study of Maugham, Stevenson and Charlotte Brontë (ロマンスとリアリズムの境界を越えてーモーム、ステイーヴンソン、シャーロット・ブロンテ研究)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之 准教授 片岡 悦久 准教授 石割 隆喜

論文内容の要旨

本論文は、イギリスの19世紀ヴィクトリア朝中期から20世紀前半にかけて活躍した英国小説界を代表する3人の小説家、シャーロット・ブロンテ(1816-55)、R.L.ステイーヴンソン(1850-94)、サマセット・モーム(1874-1965)を取り上げ、彼らの小説作品が、19世紀ヴィクトリア朝時代の代表的な二つの物語ジャンルであったイギリス国内リアリズム小説と植民地ロマンスといかに関連しているかを考察した研究である。論文は、序論、本論6章、結論、および注・参考文献から構成されており、論全体で英文で176ページ、和文400字詰め原稿用紙に換算して約550枚に相当する論文である。

序論では、3人の小説家において取り上げるべき具体的な作品を挙げ、本論で展開する論の輪郭を簡潔にスケッチする。まず、ステイーヴンソンとモームの植民地ロマンスを再評価するための視座を提示し、次に、男性中心のジャンルである植民地ロマンスを女性作家シャーロット・ブロンテはいかに書き換えたのかを考察し、最後に、一見相対立するように見える植民地ロマンスと教養小説の二つのジャンルが、国家または個人の成長についての物語として捉えたときにどのように関連するのかを論じる、と述べる。

第1章では、次の第2章、第3章で論じる小説作品の共通の舞台である南太平洋圏が、西洋の言説においてどのように表象されてきたかを、探検家、宣教師、大衆冒険家、メルヴィルやステイーヴンソンらの作家たちが残している文献・作品に言及しながら概観する。結局、西洋による南太平洋の「楽園表象」は、他者ではなく自己に言及することにより成立しているものであると述べる。

第2章では、ステイーヴンソンの中篇小説「ファレサの浜」を取り上げ、この作品は従来そのリアリズムの要素が注目されていたが、この見方に反論し、作中のロマンス的要素にこそポストコロニアル文学として評価できる面があると主張する。

第3章は、モームの『月と六ペンス』を取り上げ、主人公の画家はフランスの画家ポール・ゴーギャンをモデルとしているため、ゴーギャンについての誤った知識を読者に与えかねないとして批判されてきたという受容史について説明をしたうえで、こうした読みに反論をする。この小説の核心は、一人の歴史的人物が多数の語り手によって語られ、これによりその像が変容し、神話化される過程を前景化する点にあると主張する。

第4章は、モームの短篇小説「プール」を取り上げ、タイトルの“pool”にこめられた象徴的意味を明らかにし、混血のサモア人娘の夫であるスコットランド人が入水自殺をする事件でもって物語の幕を閉じる意味を考察する。この小説を、サモアを舞台にして展開する政治的寓話として見る読み方を探る。

第5章は、シャーロット・ブロンテの小説『ヴィレット』を取り上げ、この小説には海外植民地体験を取り込む志向性があること、女性主人公ルーシーには男性的ヒーローとしての要素が与えられていることなどを考慮すると、女性版探究ロマンスとして読むことができることを明らかにする。

第6章は、モームの『人間の絆』を取り上げ、伝統的教養小説の系譜に位置づけられているこの小説について、従来後半が高く評価されない理由を考察する。小説空間に導入された南アフリカ戦争により、主人公において人生の意味を探究する姿勢が失われ、これにより教養小説的構造が破綻をきたしたことがその根拠として指摘される。

結論では、本論で取り上げたポストコロニアル的側面をもつ小説テキストについて、リアリズムとロマンス、教養小説と植民地ロマンスなどの従来のジャンルの対立が無化される特質が見られることを改めて主張し、これを根拠にして、固定化されたジャンル区分を問い直す営みのなかに文学批評の新たな可能性が見出せることを示唆して、論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリスの19世紀ヴィクトリア朝中期から20世紀前半にかけて活躍した3人の小説家、シャーロット・ブロンテ、R.L.ステイーヴンソン、サマセット・モームを取り上げ、彼らのポストコロニアル的側面をもつ小説作品においては、ヴィクトリア朝の伝統的文学ジャンルであったリアリズム小説とロマンス物語とのあいだの対立ないしは隔壁が解体・無化されているありようを分析し、その意味を考察した研究である。ステイーヴンソンやモーム、それに南太平洋諸国出身のアラート・ウェントやシア・フィジエラらによって創出された南太平洋英文学とも言うべき新しい文学は最近注目を浴び始めているが、この文学について、ヴィクトリア朝の伝統的な物語が展開するイギリスの郷土を脱出してその舞台を海外の新世界に移しただけでなく、文学テキストのかたちにおいても慣

習的文学ジャンルからの逸脱ないしは文学ジャンル間の混淆が生じているという新局面を明快に説明できたことは、英文学研究にとって大きな貢献である。リアリズム小説、ロマンス、教養小説などの慣習的ジャンル間の相互の差異性が溶解した状況について、論者は決して悲観を見せず、むしろ新しい文学誕生の期待をこめるまなざしは貴重である。ポストコロニアル文学へのジャンル論からの新鮮な洞察にもとづいた研究として注目されよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。ジャンル論を本格的に展開するには、リアリズム小説、ロマンスなどの概念についてより一層繊細な対応が求められよう。また、南太平洋圏出身の作家の小説を論じた個別の章を設けても良かったと思われる。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。